

地域で学び地域と育つ神山校

～ 中山間地の地域内循環モデルの構築 ～

中長期 ビジョン (目的)

育成する地域人材像

- これからの「環境」「食農」等をめぐる感性と知識・技能を身につけた人材
- 様々な人と関わり合い、物事を推進することのできるコミュニケーション能力を持った人材
- 所属するコミュニティや関わった地域などのために貢献しようとする意欲を持った人材

これまでの取組

- ・ 保小中高連携(防災教育, 食育, 木育)
- ・ 地域連携(神山創造学, 課題研究, 高齢者支援)
- ・ IT活用と情報発信(民間企業との映像制作)
- ・ 産業の担い手育成(ファブラボを活用した部活動)

成果

- ・ 高校・町役場・地場企業の連携体制を構築
- ・ 多様な年代, 人との交流
- ・ 地域社会の課題を解決
- ・ 町による通学費や住まいのサポート

課題

- ・ 学習内容と進路先とのギャップ
- ・ 6次産業化のための施設整備

目標

生徒に習得させる具体的能力

- 自身の感情や考えを表現し, 発信する「伝える力」
- 多様な価値観を持つ他者と関わり, 物事を進める「協働する力」
- 体験から新たな課題を獲得し探究・解決しようとする「深める力」
- 「基礎学力」と環境・食農等に関する「専門的知識・技能」

システム

- 時代の変化とともに拡張する「環境」・「食農」の概念を取り入れたカリキュラムの整備
- 生徒の期待と学習内容を持続させた進路の開拓
- 6次産業化の流れを学べる教育環境の拡張

【研究組織概要図】

研究開発

① 「神山創造学」の再構築

- ・ 「課題研究」の深化
- ・ キャリア教育の充実
- ・ 他教科等と相互に関連させた指導
- ・ 基礎学力の強化

② 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

- ・ 外部人材を活用した「専門人材の配置」
- ・ 造園教育の概念と実践を学ぶ「スタディツアー」
- ・ 多様な進路を実現する「教育課程の構築」

③ 地域の生産・交流拠点の創出

- ・ 地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」
- ・ 人とモノが行き交う「校庭マルシェ」

④ 地域を学びの場とした実践

- ・ 演習林を活用した「森林ビジョン」
- ・ 6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」
- ・ 地域の景観保全を担う「石積み修復」

コンソーシアム

[管理機関] 徳島県教育委員会

城西神山校プロジェクトチーム

城西高校 神山校

神山町

(一社) 神山つなぐ公社

(株) フードハブ・プロジェクト

▲▲▲▲ 地域協働学習支援員

△△
△△
カリキュラム開発等
専門家

運営指導委員会

連携

地元企業、NPO、保育所、
小・中学校、大学 等

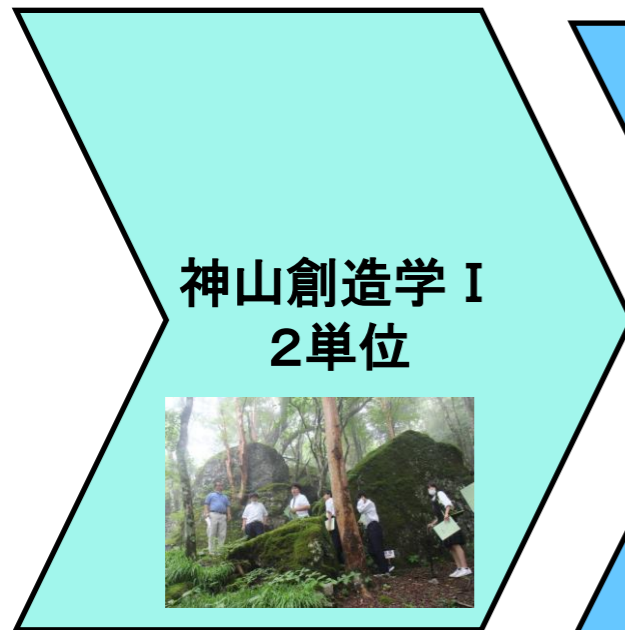
カリキュラム開発に係る成果と課題について

I 神山創造学の再構築

成果

神山創造学から課題研究への効果的接続

1年



フィールドワーク

聞き書き

2年



チームプロジェクト

地域課題
プロジェクト

3年



マイプロジェクト

- 町の歴史・文化・暮らし・産業について調査できた。
- 里山景観や中山間地の現状や課題を発見し理解を深めることができた。
- 行政や地域住民と協働し諸課題解決に取り組むことができた。

2 地域性を生かした質の高い教育環境の整備

造園教育における『専門人材の配置』

専門人材との連携を通じて「高度専門資格」取得を目指し次世代の人材育成を行った。



多様な地域連携を実現するカリキュラムの構築

神山創造学増設2単位分の教育内容充実を図るためカリキュラム開発専門家を交えて会議を行った。今後の景観保全活動や実習地の有効活用、6次産業化学習に対する意見や具体的案をいただいた。

生徒に失敗を体験させ、主体的に考え失敗を乗り越える経験を重ね、成長させていくプログラムを構築していくことが課題。



3 地域の生産・交流拠点の創出

地域の種と苗をつなぐ「シードバンク」

地域の固有種・固定種の保管機能を高校が担うことは公益的意義が高く、生徒の学習教材にもつながることから、地域でつながれてきた種子の栽培、採取、保管できる場所として手始めに、神山小麦・神山蕎麦の栽培に着手した。



人とモノが行き交う「校庭マルシェ」

生徒たちが農場実習で育てた農作物を校庭で販売し中学生や地域住民に学習活動の取組や様子を知ってもらうことを目的に開催した。



4 地域を学びの場とした実践

演習林を活用した「森林ビジョン」

神山町策定の「森林ビジョン」での様々なプロジェクトと連携するため、本校演習林において森林環境について学習するとともに、森林資源有効活用と林業後継者不足を伝える活動を部活動「森林女子部」で行った。



地域の景観保全を担う「石積み修復」

町内の高齢化が進むにつれ、神山が大切にしてきた景観の一つである石積みを保全修復していくため、その技術習得に取り組んだ。民家の石積みや耕作放棄地の石積修繕を実施し、町内の景観を高校生の力で状況改善していくことができた。



6次産業化を学ぶ「耕作放棄地対策」

町内の農業人口減少による耕作放棄地増加の対策として、高校と役場、企業とが連携し実施した。町内で70年間受け継いできた神山小麦を栽培するため、耕作放棄地の整備、小麦の栽培、商品開発、販売まで地域と連携した実践的活動を行った。



今後の展望

地域との協働

- 生徒が授業で学んだ知識・技術を地域で実践し、地域に貢献できる実感を得ることが出来る教育活動を地域と連携しながら展開していく。
- 生徒の進路実現に向けて、校内での学びと地域での学びを相互に結びつけたカリキュラム開発を行ってきた。今後も、分校という少人数の利点を生かした、学びの個別最適化を図るための地域に開かれた学校運営を行っていく。
- コンソーシアムで培われた地域とのつながりを継続させる。そのために次年度から立ち上げる学校運営協議会(コミュニティスクール)に地域協働部会として導入していく。そして部会として組織立てた中で計画的に連携、協働を行っていく。

目指すべき生徒像

- 校内外で多様な人たちと関わりながら、教科書から理論を、実社会から実践力を学ぶことのできる生徒
- 少人数の中で自分を表現し、他者の表現を受け止める。そのために発表や話し合いを繰り返し行い、そのコツをつかむことのできる生徒
- 食・農・環境といった自然の中で五感を使って学び、感性や技能を鍛えていくことのできる生徒
- 地域の方や仲間と協力して作り出す経験を積み重ね、体験の経験化を図る意欲を持った生徒

コーディネーターの必要性が広く共有された

研究開発に関する各種調整、県外生募集、地域連携授業など多岐にわたる活動から実績が生まれ、中学校から地域連携の相談が寄せられるなど、地域内でコーディネーターの必要性が認識された。

コーディネーターが学校に対して全体感を持った関与・提案がしやすくなった

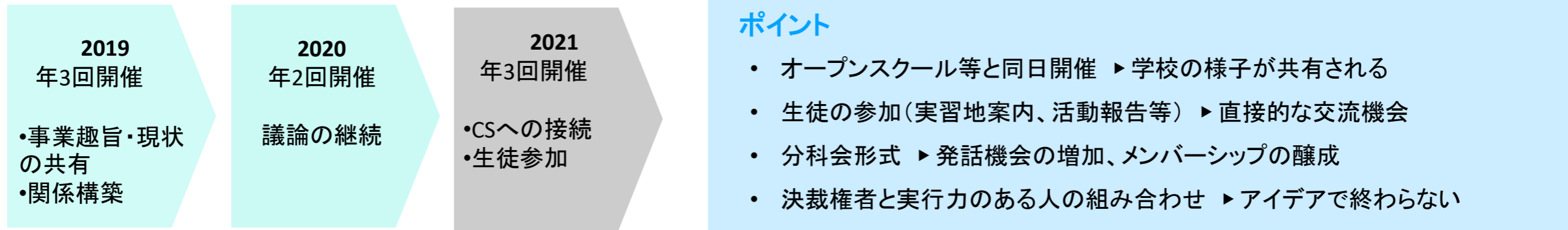
月例のマネジメント会議、研究開発の進捗把握、グランドデザインの作成等を通して、学校現場が持つ課題感や手を伸ばしきれない部分が見えるようになり、より実態に即した関わりが可能になった。

コーディネーターの主な活動 ※ 2016年度より地域公社に町役場から委託を受けて実施(本事業上は地域連携活動支援員)

項目	詳細
授業や校内活動に関するもの	<ul style="list-style-type: none">・「神山創造学」「課題研究」のカリキュラム開発、実施（県の社会人講師として）・その他地域連携活動の企画・コーディネート
授業外の活動に関するもの	<ul style="list-style-type: none">・有償ボランティアサークル「孫プロ」の伴走、運営補助・インターンシップのアレンジ、キャリア支援
広報・地域留学に関するもの	<ul style="list-style-type: none">・役場内特設ページの制作と更新、学校案内パンフレット制作補助・県外生向け説明会、地域留学体験プログラムの企画、運営・入寮および下宿にかかるサポート
全体に関するもの	<ul style="list-style-type: none">・地域連携やキャリア教育等に関する教職員研修の企画、実施・グランドデザインの作成に関するデザイナーとの折衝等コーディネート・文科省事業のプロジェクトチーム会議、コンソーシアム会議の企画支援、補助

高校・地域企業・各種学校・大学等でともに話し合う文化が醸成された

課題やアイデアを自由に交し合える場が定期的にあることで、学校と地域の相互理解が進んだ。学校の方向性や育てたい生徒像が共有された状態で、協力や相談が双方に行われている。3年目から生徒が加わるようになって更に熱が増している。



参加者コメント

- 地域社会とのつながり重視の考え方は大切。町全体をフィールドにする考えも素晴らしい。継続は力。 [町長]
- 神山校の取り組みを知ることができて、この会に参加してよかった。これから生きるための力を学ぶことができている [保育所 所長]
- 分科会で生徒さんと会話できたのはとても新鮮でした。内容は予想外のもので、我々大人の方が勉強になりました。今後も是非続けていただきたい。 [地域企業 経営者]



ステイクホルダーマネジメントの難しさが露わになった

出席率の高いメンバーがいる一方、全体としては会議出席者に減少傾向が見られた。

考えられる要因 ①依頼時点での期待値調整が不十分だった ②地域側の参加意義が見えにくい

参加人数の推移

	2019			2020		2021	
	第1回	第2回	第3回	第1回	第2回	第1回	第2回
コンソーシアム メンバー	26	13	18	17	13	16	12
神山校教員	20	20	20	19	20	19	19
神山校生徒						10	8

次年度の学校運営協議会に向けて

関与	3年間	▶	1年間(継続あり)
テーマ	学校指定(研究開発)	▶	学校・地域から持ち寄り
部会メンバー	組織代表者中心	▶	若手中心

KEYWORD
大人の
マイプロ

期待される効果

- 単年度で集中的に取り扱うことで取り組み内容や変化が見えやすくなる
- メンバーを固定化させないことで、地域内に顔の見える関係性が増えていく
- 必要性が共有されるテーマについて集中的に取り扱うことで、コミットメントが明確になる

コーディネーター・コンソーシアム設置を通しての課題(達成できなかったこと)

質の高い教育活動を支える資金面の仕組みが十分に構築できていない

採択当初から事業終了以降の継続的な活動資金を得る仕組みの構築を念頭に置き、特定会社の設立など検討を続けたものの、現時点で形にはなっていない。

神山町役場から生徒の活動を応援する資金(財源はふるさと納税)の枠組みが構築されたことは一つの成果と言えるが、用途が限定的であり、実習棟への設備投資等柔軟に使えるものとは言えない。

コンソーシアム会議の運営面について

19名のコンソーシアムメンバーのうち6名が町外ということもあり全員が集まって行う会議の回数がどうしても限られてくる。学校や地域の課題解決、地域社会とのつながりを重視していく上で、可能な限りメンバー同士が集まって話し合いが持てる機会を作っていく必要がある。機動性のある部会を持った組織作りを次年度からのコミュニティースクールに導入する。